

## 大分県統計教育研究発表会が開催されました

県内の小中高校で統計教育に携わっておられる先生方で構成する「大分県統計教育研究会」は昭和38年以来半世紀に近い歴史をもつ、県内統計教育推進の拠点組織です。2年ごとに研究校を指定して、統計教育の実践的な研究を深めておられます。平成19年度・20年度は臼杵市立佐志生小学校が研究指定校となり、本年10月29日、同校において研究発表会が開催されました。その模様をご紹介します。

当日は、県内各地の小中学校から70余名の先生方が参集し、佐志生小学校の2年間の研究実績についての報告を聞き、また実際に統計授業の様子を観察し、それを踏まえて授業研究会がもたれました。

発表会には大分教育事務所の土崎所長や臼杵市教育委員会の吉田教育長も参加して、先生方を激励するとともに、研究授業を熱心に観察されていました。

佐志生小学校の児童数は全学年で53名。2年間の実践研究は、統計を独立した教育にとらえるのではなく、「豊かな心と自ら学ぶ力を身につけた心身ともにたくましい子どもの育成」という学校の教育目標の下に「自分の思いや考えを伝え合おうとする子どもの育成～統計的な考えを生かした授業の構想と展開～」との研究主題を設定しました。

実践教育の経緯と成果は、73ページにまとめられ、会場で配られた「研究紀要」に詳しく説明されていました。学年ごとに指導方法について仮説をたて、授業を行い、仮説を修正していった過程が記録されています。身の回りや地域に題材をとって、「集める（聞き取りやアンケートで調べる）」→「まとめる（表やグラフで表す）」→「読み取る」→「いかす」のプロセスを踏んでいきました。



公開授業は3年生「ふれあい市場の人気のひみつをみつけよう」と6年生「名月もらいが佐志生で続いている理由をさぐろう」の二つのクラスで行われました。

ふれあい市場というのは、地域の有志が土日に開いている朝市です。子どもたちは、買い物客に、商品の魅力や住まいをアンケートし、その結果をグラフに表しました。それを見ながら、情報を読み取る授業です。魚が新鮮、魚が安いと答えた客が圧倒的に多く、また、佐志生地区の外からも予想以上にたくさんのお客さんが訪れていることがわかりました。

名月もらいでは、自分の家族や地域の人に、名月もらいを準備したか（プレゼントを用意したか）、なぜ準備したのか、子どもと一緒に暮らしているか等を聞いて回り、その結果をここでもグラフに表していました。グラフを見ながら、なぜ続けているのだらうと考えさせる授業です。

ともに、地域のことを自分たちで調べ、結果をグラフ化し、要因を分析する統計調査の一連の流れが完結しています。20年ぶりに小学校の教室を覗いた身には、小学生でもここまでできるのかと驚きが先に立ちました。こういう経験を重ねた子どもたちが大人になったときには、統計が暮らしの中により身近なものになっているだろうと、頼もしく感じました。

また、授業中の子どもたちが実に明るく伸びのびとしていたのも印象的でした。

統計を生かした授業をここまで進められた板井校長をはじめとする佐志生小学校の先生方に、統計に携わる者として厚く御礼を申し上げますとともに、このような統計教育の実践をリードしてこられた大分県統計教育研究会の今後の活動に期待したいと思います。